

るという指摘、そして佐藤氏が強調した、失われた個々の記憶を補完するために写真などの資料を異なる視点から読み解くことの重要性など、数多くの問題提起がなされ刺激的であった。また、唯一、近代を専門としていない津田氏がコーディネーターを担当したことで、ともすれば専門的になりがちな論点を、一般の参加者にわかりやすい形で議論することができたように思われる。

残念だったのは、これまでの公開研究会で話題になった震災後～復興期の時代状況と「都市美」運動との関連があまり議論にならなかったことである。また、戦時期の

「都市美」運動の評価についてそれぞれ異なる評価を行った川西氏と鈴木氏の指摘は、掘り下げて議論していただきたかった。都市景観という、きわめて現代的なテーマには論じるべき問題があまりにも多いため、充実した議論が展開されたことは良かったが、これらの点は今後の課題である。今回の公開研究会は学園祭期間中であったことで、学生以上に多数の一般参加者が会場を賑わせ、企画者の一人として嬉しい限りであった。

(執筆：高野宏康)

2009年度、ふたつの公開研究会を終えて

以上、7月18日、10月31日の2回の公開研究会のテーマは、2008年度に開催した公開研究会「震災復興と文化変容」のテーマを引き継ぐものであった。実はこのテーマはその先の歴史も担っている。2003年度から始められた21世紀COEプログラムにおいて、災害研究グループは関東大震災の被害についての研究領域で地震学の分野の専門家と共同研究を行い、その成果の一部を「関東大震災 地図と写真のデータベース」として公開している。これに続いて2008年度開所した非文字資料研究センターにおいては、関東大震災の復興を課題とすることにしたのである。その結果、復興領域ではもっとも研究が進んでいると思われる都市計画の分野について、外部の専門家を招いて研究を進めた。この分野はわたしたち歴史系の研究者のみでは果たしえない課題であるから、共同研究をすることで、それぞれの研究成果を重ね合わせることを期待できると考えたのである。すなわち、都市計画領域の研究者にはまずは、都市計画によって震災後の都市はどのように変貌したのか、また、都市に住む人々が国家や行政などの上からの計画をどのように自らのものとして取り組んだのか、その実際の経過はどのようなものなのかを明らかにしてもらいたいと考えた。歴史系の研究者としてわたしたちは史料の所在を調査し、新しい史料発掘を努め、それらを公開して、公の議論に付したいと考えたのである。

現在までのところ、2008年度第3回公開研究会「震災復興と文化変容—関東大震災後の横浜・東京—」においては都市計画の横浜と東京における違いなどは明ら

かにした。しかし、歴史系の研究者としてのわたしたちが都市計画という事業に批判的観点を持つには至らなかった。そこで、2009年度第1回公開研究会「震災復興期における都市の文化変容」においては、震災そのものの社会的影響をどう考えるかを近代住宅史と近代美術史の分野の専門家をお招きし、震災の慰霊と展示施設である復興記念館について高野が報告を行った。震災の影響について視点の違いはあるものの、生活文化の著しい変容が明らかにされた。しかしながら、その根底には震災そのものの凄惨な経験を振り払うかのような衝動が消費生活、新生活への欲求を駆り立てるものであったという点も見透かすこともできた。続いて、2009年10月に開催された公開研究会「よみがえる都市景観—震災復興期の「都市美」運動—」では、震災復興期の「都市美」運動に焦点をあて、関東大震災後から戦時期に至るまでの景観変容をテーマとした。

一連の公開研究を終え、都市計画の分野では、これまで私たちは関東大震災後の「帝都復興事業」は成功したものという印象をもってきたが、必ずしもそうではないことや、ファシズムおよび戦時体制と都市景観や建築との関係性についての議論がなされていないことにも気づかされた。また、戦災で再び都市景観が破壊されるまでの歴史へ論議が進められたが、震災の各階層の都市生活者の顔が見える議論には至らなかった。歴史学系のこの分野での研究が今に至るまで不足していることを痛感し、わたしたちに課された課題の大きな山を見た思いであった。

(執筆：北原系子)